

秋

群馬県立女子大学名誉教授 北川 和 秀

◎ 前回の宿題

○ 厚見王

系統不明。舎人親王の子とする後世の資料あり。

○ 四一八五番歌の解釈

うつせみは 恋を繁みと 春設けて 思ひ繁けば 引き攀ぢて 折りも折らずも
見る毎に 情和ぎむと 繁山の 谿辺に生ふる 山吹を 屋戸に引き植ゑて
朝露に にはへる花を 見る毎に 思ひは止まず 恋し繁しも(一九・四一八五)

この世の人は恋繁きものなので、春になると物思いにとらわれる。それで、引き寄せて折っても折らなくても、見るごとに気持がおさまるだろうと、繁った山の谷に生えている山吹をわが家の庭に植えて、朝露に色づいている花を、見るごとにかえって思いは止まず、恋心がしきりにわいてくることだ。

(日本古典文学大系) 諸注釈も同様

○ 三九一三番歌の解釈

霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで(一七・三九一三)

① ホトトギスが棟の枝に飛んで行って止っていたら、珠と見るほどに家の棟の花は散るだろうな。(日本古典文学大系)

② 時鳥よ、お前が奈良の家の棟の枝まで飛んで行って留ったなら、花はほろほろと散りこぼれることだろう。まるでこぼれ落ちる玉のように。(新潮日本古典集成)

③ ほととぎすが棟の枝に行つてとまっていたら、さぞ花は散るだろうよなあ、玉と見るばかりに。(万葉集全注)

④ このほととぎすが その棟の枝に 飛んで行ってとまったら さぞ花が散ることだろうな 玉かと見紛うばかりに。(新編日本古典文学全集)

⑤ ホトトギスが棟の枝に飛んでいって止まったら、花は散るだろうな。玉と見るばかりに。(新日本古典文学大系)

【秋の七草】

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首（秋雑歌）

①秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 其の一（八・一五三七）

②萩の花 尾花葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花 其の二（一五三八）

*二首目は五七七五七七の旋頭歌

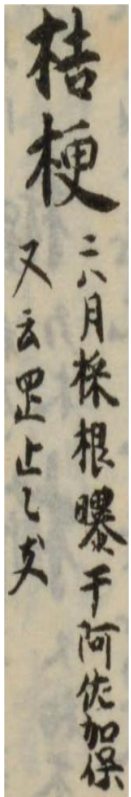
【あさがほ】（ききよう）

①朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけれ（一〇・二一〇四）

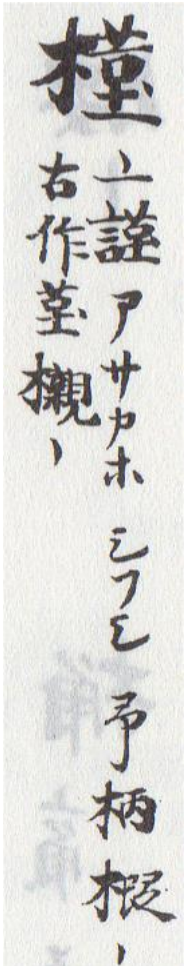
秋雑歌

②言に出でて言はばゆゆしみ朝貌のほには咲き出ぬ恋もするかも（一〇・二二七五）

秋相聞



（新撰字鏡 小学篇字及本草木異名第六十九）



（観智院本類聚名義抄 仏下本一〇九）

【はぎ】

*萩の花は鹿の妻。

大宰帥大伴卿の歌二首（そのうちの一首）秋雑歌

①わが岡にさ男鹿来鳴く初萩の花 嬌問ひに来鳴くさ男鹿（八・一五四一）

*野に自生している萩。

②秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に（一〇・二一〇三）

秋雑歌

*家の庭に植えられている萩。

かむなきべのまそをとめ
巫部麻蘇娘子の歌一首

③わが屋前の萩の花咲けり見に来ませ今二日だみあらば散りなむ（八・一六二一）

*これから咲く萩。

④わが待ちし秋は来りぬ然れども萩の花そもいまだ咲かずける（一〇・二一二三）

秋雑歌

*満開の萩。

⑤見まく欲りわが待ち恋ひし秋萩は枝もしみに花咲きにけり（一〇・二一二四）

秋雑歌

*露の置く萩。

大伴宿祢家持の秋の歌三首（そのうちの一首）秋雑歌

⑥秋の野に咲ける秋萩秋風に靡ける上に秋の露置けり（八・一五九七）

右のものは、天平十五年癸未秋八月に、物色を見て作れるなり。

*黄葉する萩。

天平勝宝五年八月十二日、二・三の大夫等の、各壺酒を提げて高円の野に登

り、聊かに所心を述べて作る歌三首（そのうちの一首）

⑦天雲に雁そ鳴くなる高円たかまどの萩の下葉はもみち敢へむかも（二〇・四二九六）

右の一首は、左中弁中臣清麻呂朝臣のなり。

*散る萩。

⑧真葛原まふすはらなびく秋風吹くごとに阿太あだの大野の萩の花散る（一〇・二〇九六）秋雑歌

*その他

天平三年辛未秋七月、大納言大伴卿薨りし時の歌六首（そのうちの一首）

⑨かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも（三・四五五）

右の五首は、資人余明軍が、犬馬の慕、心の中の感緒に勝へずして作る歌。

⑩ことさらに衣は摺らじ女郎花咲く野の萩ににほひて居らむ（一〇・二一〇七）

秋雑歌

【をみなへし】

大宰の諸卿大夫と官人等と筑前国の蘆城の駅家に宴する歌二首（そのうち
の一首）秋雑歌

① 女郎花秋萩まじる蘆城野は今日を始めて万代に見む（八・一五三〇）

右の二首は、作者詳らかならず。

② 手に取れば袖さへにほふ女郎花この白露に散らまく惜しも（一〇・二一一五）

秋雑歌

【すすき・をばな】

① 人皆は萩を秋と云ふ縦しわれは尾花が末を秋とは言はむ（一〇・二一一〇）

秋雑歌

② 夕立の雨降るごとに春日野の尾花が上の白露思ほゆ（一〇・二一六九）秋雑歌

肥前国の松浦郡の狛島の亭に船泊てし夜、遙かに海の波を望み、各旅の心を働みて作る歌七首（そのうちの一首）

③ 帰り来て見むと思ひしわが屋外の秋萩薄散りにけむかも（一五・三六八一）

右の一首は、秦田麻呂のなり。

【いね】

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首

① 秋の田の穂向の寄れること寄りに君に寄りなな事痛かりとも（二・一一四）

② 稲春けば輝る吾が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ（一四・三四五九）

未勘国東歌

③ 鳩鳥の葛飾早稲を饗すともその愛しきを外に立てめやも（一四・三三八六）

下総東歌

坂上大娘の、秋の稲の藪を大伴宿祢家持に贈る歌一首（秋相聞）

④ わが蒔ける早稲田の穂立ち造りたる藪そ見つつ悥はせわが背（八・一六二四）

壬申の年の乱の平定しぬる以後の歌二首

⑤ 大君は神にし坐せば赤駒の匍匐ふ田井を都となしつ（一九・四二六〇）

右の一首は、大將軍贈右大臣大伴卿作れり。

【かへるで】（かえで）

大伴田村大嬢の妹坂上大嬢に与ふる歌二首（そのうちの一首）

①わが屋戸に黄変つ鶏冠木見ること妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し（八・一六二三）

秋相聞

②子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（一五・三四九四）

未勘国東歌

【もみち】（特定の植物ではない。動詞もある。終止形は「もみつ」）

藤原朝臣八束の歌二首（そのうちの一首）秋雑歌

①春日野に時雨降る見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高円の山（八・一五七一）

②わが背子が白袴衣行き触ればにほひぬべくももみつ山かも（一〇・二一九二）

秋雑歌

橘朝臣奈良麻呂の集宴を結ぶ歌十一首（そのうちの一首）秋雑歌

③黄葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか（八・一五九一）

右の一首は、内舍人大伴宿祢家持のなり。

以前の冬十月十七日に、右大臣橘卿の旧宅に集ひて宴飲しき。

竹敷の浦に舶泊てし時に、各心緒を陳べて作る歌十八首（そのうちの一首）

④竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時そ来にける（一五・三七〇一）

右の一首は、副使のなり。

軽皇子の安騎の野に宿りましたし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌（そのうちの

短歌一首）

⑤ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し（一・四七）

柿本朝臣人麻呂、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌二首 短歌并せたり（その

うちの短歌一首）

⑥秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも（二・二〇八）



2241. ススキ (改枚3863)



363. ミヤギノハギ (改枚1300)



1450. ミソハギ (改枚1891)



436. オミナエシ (改枚2880)



1345. カワラナデシコ (改枚401)



431. クズ (改枚1397)

『原色牧野植物大図鑑』による



『原色牧野植物大図鑑』による